

前回掲載した、仙台市の新しいホール（+震災メモリアル）の設計の途中経過の公開については、その後さまざま動きがあったようです。報道には、このようなものがありました。

まずは、1月17日付の河北新報の記事です。

（第三種郵便物認可）

河口 河口

音楽ホール単体建設要求

「音楽と舞台芸術市民の会」発足

仙台 来月シンポ 課題共有

仙台市が青葉区青葉山に整備する音楽ホールと東日本大震災メモリアル拠点の複合施設について、計画を見直して独立した音楽ホールの建設を求める学識者らが市民団体「音楽と舞台芸術市民の会」を設立したことが16日、分かった。2月に市内でシンポジウムを開き、施設の課題に関して広く市民と共にを図る。

市民の会は大学教授や舞台芸術の愛好家らが今月設立。26日に意見交換会を開く。市民団体とは別の団体で、施設の音響性能を特に疑問視する。「2000席と規模が大きく、音がホール内に十分に届かない。オ

ケストラの魅力を損なう」懸念がある。音楽ホールから舞台芸術に適したプロセニアム（劇場）形式に転換できる構造が、建設費（548億円）を押し上げているとも指摘。音楽ホールと舞台芸術用ホールをそれぞれ建設しても費用を削減できると主張している。

東北大学院理学研究科

准教授で、市民の会の本堂毅代表は「建設に必要な予算や多目的機能の妥当性について、科学的知見が共有されていない。広い視点から議論するため市民の会を設立した」と話す。

シンポジウムは2月28日午後2時、青葉区のトクネットホール仙台（仙台市民会館）で開催する。定員30人。参加無料。申し込みはGHA14351@nifty.com

複合施設を巡っては、市民団体「音楽ホール・メモリアル拠点を考える市民会議」も今月26日、青葉区の市地下鉄東西線国際センター駅・青葉の風アラスで市民意見交換会を開催する。

（遠藤智朗）

2026年(令和8年)1月27日(火)

仙台市が青葉区青葉山に整備する音楽ホールと東日本大震災メモリアル拠点の複合施設を巡り、市が総事業費646億円との試算をまとめたことが26日分かった。コスト縮減と工期短縮を図るため、設計段階から施工業者が計画に関与する「ECI方式」を採用する方針も固めた。総事業費のうち、建物や周辺整備を含めた全体整備費が623億円、館内備

品や震災関連の展示制作費を計23億円と見込んだ。全体整備費の内訳は、建築工事に582億円、設計・監理に30億円、文化財調査など関連整備に11億円。建築工事費のうち建築部分を計548億円で、外構工事を11億円、土壤汚染対策を23億円と算出した。いずれも物価上昇次第でさらに入れる可能性がある。

市が施設整備に向けて採用するECI方式は、設計

複合施設総事業費646億円

仙台市試算 物価上昇なら増額も

そして、1月27日付の、同じく河北新報の記事の前半です。

建設工事費は、説明会の時の

「548億円」と同じですが、それ以外の設計費や関連整備にかかるものを加えて、総事業費が「646億円」までに増えてしまった、ということを伝えています。なぜ、説明会の時には、建設費しか知らされなかったのでしょうか。



同じ記事の後半は、前の記事の最後に記載されている会合の結果報告でしょう。これとは別の団体のシンポジウムは、記事にもあるように、2月28日に開催される予定です。

経費膨張 市民が懸念

建築士有志ら「会議」開催

仙台市が青葉区青葉山に整備する音楽ホールと東日本大震災メモリアル拠点の複合施設を巡る意見交換会「音楽ホール・メモリアル拠点を考える市民会議」が26日夜、市内で開かれた。

建築工有志らが主催し、市当局や設計関係者らと膨らむ事業費やホールの仕様について意見を交わした。

市地下鉄東西線国際センターホール（青葉区）であった会合には約80人が参加。来場者らが計画への思いや意見を述べ

べ、市の担当者と基本設計を担当する藤本壮介建築設計事務所（東京）の関係者が応える形式で進んだ。

施設建築費が前回試算比

1・5倍の548億円、総事業費が646億円に上る

点について参加者が妥当性を疑問視。市幹部は資材や人件費上昇に触れ、「青天

井でいいとは認識していない。コスト縮減への意識を持った進める」と理解を求めた。

大ホールの壁が開いてロ

ビーと一緒に化する大胆な当

初案を断念した経緯に関して、設計事務所側は「音

楽関係者らの抵抗もあり、内部で賛否両論があった

と説明。ホールと離れたロ

ビーを施設の中心に置いた

現状の修正案をアピール、

「災害文化と音楽の融合と

いう価値がより良い方向に

向かう」と強調した。

基本設計が3月末で完了する見通しで、会場からは

市民との対話の機会を今後

も設けるべきとの声が出た。

有志は年度内に同様の企画の開催を検討する。

さらに、2月12日のNHKのニュースでは、このような報道がありました。

県が整備進める複合施設の名称案「宮城県立劇場」に決定

宮城県は2028年度中のオープンを目指して仙台市宮城野区に整備を進めている複合施設の名称の案を「宮城県立劇場」に決めました。

県は仙台市にある宮城県民会館とみやぎNPOプラザを統合し、宮城野区の仙台医療センター跡地に新たな複合施設を建設しています。

およそ5万3000平方メートルの敷地に建設される地上5階、地下1階建ての施設には、東北地方で初めて4つの舞台を入れ替えて利用できる「四面舞台」が導入される計画です。

県はこの施設の名称の案を「宮城県立劇場」に決め、今月17日に開会する県議会の2月定例会に提出する設置条例案に盛り込む予定です。

名称の理由について、老若男女誰でも親しむことができ時代や流行に左右されないシンプルなものにしたとしています。

県民会館とみやぎNPOプラザをめぐっては、村井知事が、当初、宮城県美術館と集約する方針を示していましたが、美術館は建築物として文化的に高い評価を得ているため計画を見直すべきだという声が上がり、現地で改修することになった経緯があります。

「宮城県立劇場」は、2028年度中のオープンを目指して整備が進められ、県議会での条例案の可決後に正式な名称となります。

このように、新しいホールについては、最近になってまたまた建設のための予算がとんでもなく増額されていることが明らかになっていました。とにかく、今の設計を変えないためには、このぐらいかかるのだ、と開き直っている感がありますね。でも、去年参加した説明会でも明らかになっていたことなのですが、このホール、というか、建築物は、余計なものが多すぎます。たとえば、「目玉」として提案されている「移動する客席」ほど無駄なものはありません。というか、それを使ってホール全体の構造を変えるというアイディアそのものが、全くの無駄の塊なのですよ。つまり、コンサートホールと劇場とを一つのホールで賄おうとしているのですが、そんなものを高次元で実現させることは音響面ではまず不可能です。前のページにあったように、宮城県が作るホールは、その名も「宮城県立劇場」となることが決定し、文字通り立派な「劇場」が出来るのですから、オペラや演劇はそちらに任せたらいいのではないかでしょうか。そして、こちらは、そんな移動客席とか、それを囲むバックステージ、そして、吊物を収納するフライタワーなどをなくして、その代わりに固定されたステージの周りの客席にオルガンを入れて、音楽専門の「コンサートホール」にすればいいだけの話です。そうすれば、大幅に建設費全体が削減できるはずですよ。

悲しいかな、仙台市は、まずオルガンを設置するということに対して全くネガティブな態度しか持っていないことが、最近公開された、去年の市民説明会の後にネットで募集した質問に対する返答で明らかになっています。その全文は、こちらで見ることができます。

<https://jurassic.fool.jp/snp/313/comment.pdf>



その中では、たとえば、21番目の

2000人のキャパを減らしてもパイプオルガンは必要。パイプオルガンの莊厳さは、震災メモリアルにふさわしいシンボルとして大きく貢献するのではないか。

というご意見に対しては、

本市施設の大ホールは、多様な公演のニーズ、市民の皆様の多方面からのご要望に最大限対応すべく、転換型の2,000席規模のホールとしたところでございます。このため、パイプオルガンの設置は予定しないところでございますが、生の音源に対する優れた音響性能を持ち、高く評価されるホールの実現を目指してまいります。

と答えていましたし、25番目の

- ・ホールの多目的化はどうしても常に短し襷に長しになってしまい、音響的に良い影響を与えないと思う。出来たら純粋な音楽ホールとして世界に自慢できるホールを作ってほしい。
- ・音楽ホールにパイプオルガンは必須。近現代の大規模な管弦楽曲ではパイプオルガンが使われる曲が多数ある。何十年か越しのホールが出来るのであれば、完全なホールを創ってほしい。

という2つのご意見に対しても、

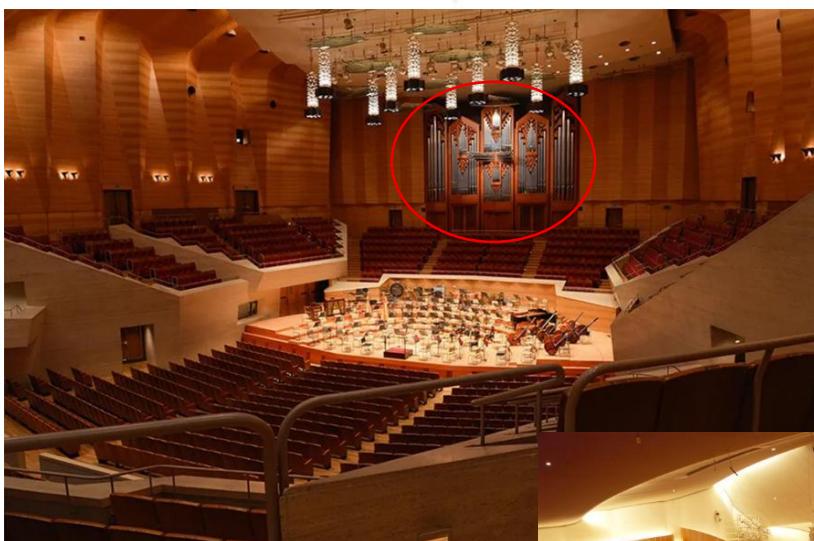
本市施設の大ホールは、多様な公演のニーズ、市民の皆様の多方面からのご要望に最大限対応すべく、転換型の2,000席規模のホールとしたところでございます。このため、パイプオルガンの設置は予定しないところでございますが、生の音源に対する優れた音響性能を持ち、高く評価されるホールの実現を目指してまいります。

既存の施設の中にも、音響性能が高く評価される転換型ホールが全国に多数ございます。本施設では、世界的な実績を持つ音響設計会社に音響コンサルティング業務を委託し、音響反射板の重量をはじめとして、音響性能確保のために考慮すべき点を取りまとめた「音響ガイドライン」を定めております。設計プロセスにも上記音響設計会社や劇場に関する多数の専門家が参画しており、その知見を十分に生かしながら整備を進めてまいります。

と、明確にオルガンの設置を、2カ所とも全く同じ文言で否定している上に、なんの根拠もない転換型ホールの利点のみを強調しています。

さらに、ちょっと気になっていたこともあります。それは、去年、新しいコンサートホールの中間報告を聞いた説明会の時に、「2000席のホールは大きすぎる」という声が結構あったということです。ですから、なんだか最近は「仙台のホールは2000席ではなく1500席の規模にすべきだ」という声が、あちこちから聞こえてくるようになっていました。

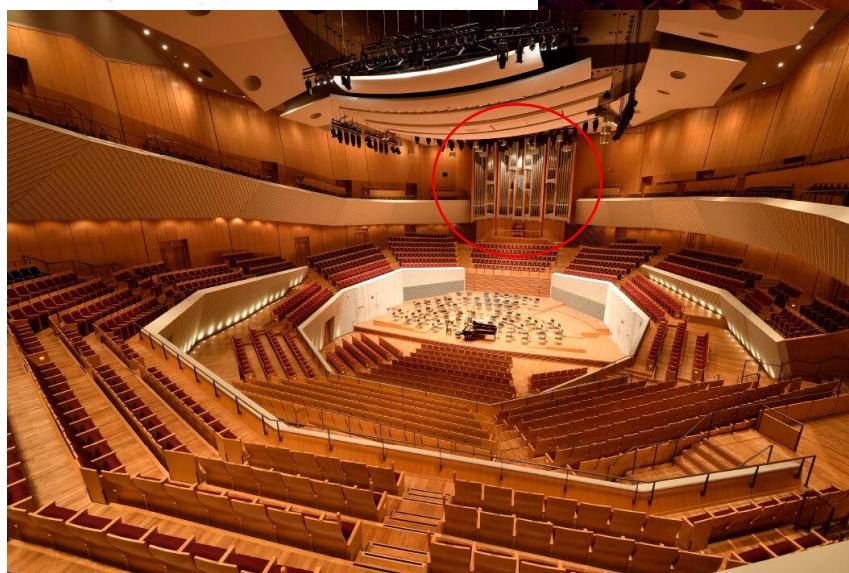
確かに、あの説明会の時には、さる発言者が「ウィーン・フィルの場合は客席数は1200～1300で、世界的に仙台フィルよりはるかに大きな規模のオーケストラが演奏するところでも、1500席ぐらいのホールが使われている。」と言っていたのです。しかし、調べてみると、それは全くの事実誤認であることが分かりました。それを明らかにするために、ここで、実際に「世界的なホール」と言われているコンサートホールの座席数を見てみましょう。それは、この新しいホールの音響設計にも参加している永田音響設計が手掛けた世界中のホールの完成した年と客席数です。すべて、仙台市のホールのコンサート・モードと同じ「ヴィニヤード・タイプ」です。まずは国内のホール。



●サントリーホール
[2006席/1986年]



●札幌コンサートホール Kitara
[2008席/1997年]



●ミューザ川崎シンフォニーホール
[1997席/2004年]

そして、外国のホール。



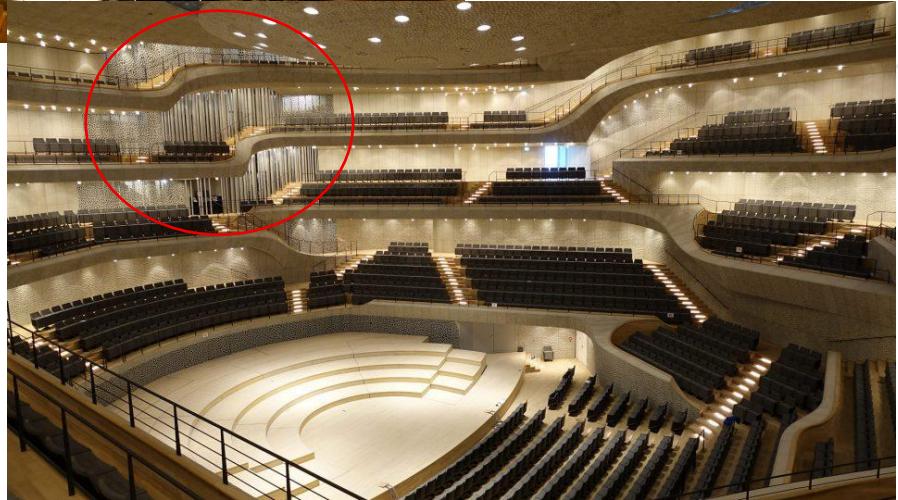
●ウォルト・ディズニー・コンサートホール（アメリカ）
[2265席/2003年]

●DR コンサートホール
(デンマーク)
[1800席/2009年]



●フィラルモニー・ド・パリ
(フランス)
[2400席/2015年]

●エルプ・フィルハーモニー
(ドイツ)
[2098席/2017年]



さらに、それ以前に作られていた「世界的なコンサートホール」です。

下の2つは「シユーボックス・タイプ」。



●ベルリン・フィルハーモニー
(ドイツ)
[2438席/1963年]



●ムジークフェラインザール
(オーストリア)
[1800席/1870年]



●コンセルトヘボウ
(オランダ)
[2037席/1888年]

どうでしょう。これらのホールは、最低でも1800席、多いものでは2400席を超えるものまでありますね。もちろん、すべてのホールにパイプオルガンが設置されていることもおわかりでしょう（赤丸の中）。

誤解されないように言っておきますが、これは1500席のホールを否定するものではありません。確かに、このサイズでしたら、通常は14型以下の演奏しか行っていない仙台フィルを聴く分にはなんの不足もありませんし、ニューフィルのようなアマチュアのオーケストラでも、ほぼ満席にすることは出来なくはありませんから、演奏会場としては理想的でしょう。そういう意味での需要は確実にあるはずです。

しかし、今回のホールの設計者は、「外国のオーケストラも呼べるような、世界的なホールと並ぶものを作る」と言いきっているのですから、そこで2000席という数字が出てくるのは至極当たり前のことなのです。そして、言うまでもありませんが、これらの「世界的なホール」の中には、「転換型ホール」、つまり、「移動する客席」を備えたホールなど、皆無です。

ですから、そんな問題にすり替えられず、理想的なコンサートホールとはどういうものなのか、という議論をきちんとしてほしいと、願っているのですけどね。

それと、永田音響設計で実際にこれだけのホールの音響設計に携わっていた豊田泰久さんは、おそらく現在はその会社での現場の仕事はほとんどなさってはいないのではないかでしょうか。確信はありませんが、この仙台のホールの音響設計にも、直接携わってはいないのでは、と思うのですが。